

## 中里介山論のためのノート

### 小説『百姓弥之助の話』にみる

#### 中里介山の現実認識

平島成夫

中里介山の小説『百姓弥之助の話』は、介山の主著、小説『大菩薩峠』につぐ、中里介山を語るためにもっともまとまった作品である。

この作品は、全七冊から成り、第八冊を「安藤昌益の巻」にするか、「頃近見聞の巻」にするかと予告し、続刊がさらに続くことを予想させながら、突然、断ち切られてしまっている。この中絶ともいえる擱筆のありかたについては、これから論じられなければならない多くの問題を含んでいるが、さし当っては、巷間の七冊本、小説『百姓弥之助の話』<sup>注(一)</sup>を一つの作品として把えて考えてみたい。

百姓弥之助の「弥之助」<sup>注(二)</sup>は、介山の本名であって、作家としての介山からは、その生ま身の実体であり、それを作品の主人公とすることで、一人称の表現から、三人称に転化する操作によって、極めて

主観的な主張にも客観性を持たせる余裕を保持させたのである。介山の考え方が作品に投影されているというよりはもっと直接的であって、思想的にも行動の上でも、介山と等身大で、視点の高さを同じくする人物を造形することによって、主張を貫こうとしている。しかも、作中の人物を創り上げることは、介山から独立した人格を持たせることであって、発想や行動に自由を確保させたのであるが、それは、またそこに、かえって、作家介山の直接的な発言を保障するという構造にもなっているのである。

小説『百姓弥之助の話』の第一冊「植民地の巻」の序文は、つぎのように書きはじめられている。<sup>注(三)</sup>

人間世界第一の長篇小説「大菩薩峠」の著者は今回また新たな長篇小説「百姓弥之助の話」を人間世界に出す。

ここには、介山自身が直接顔を出している。小説『大菩薩峠』の著者は中里介山であることは周知の事実であり、この著者が小説『百姓弥之助』の話を出版するということで、わかりやすいが、この序文の後の方には、つぎのような表現が現われる。

自ら筆を執って書いた処もあれば、そうで無いところもあるが、

要するに文字上の責任は、百姓弥之助の唯一無二の親友たる介山居

士が背負って立ち、出版の方も同氏が一肌ぬいで呉れることになり、

というのである。そして、この序文のおしまいには

神武紀元二千五百九十八年

西暦千九百三十八年

昭和十三年

春のお彼岸の日

百姓弥之助 敬白

となっていて、百姓弥之助が出てくる。

この序文の筆者は百姓弥之助だが、出版者は介山だという構造だということになるのか。ここに、百姓弥之助を造形する介山の意図、この作品に取り組もうとする介山の姿勢が見られるのである。

この序文の中で「百姓弥之助」は、つぎのように紹介される。

「百姓弥之助」は日本帝国の忠実なる一平民に過ぎない、全く忠実なる一平民以上でも無ければ以下でもない、……官禄の一銭も身に受けていないし、名誉職の一端を担うほどの器量も無い、ただ

注(四)

一町歩の畑」と一町五畝の山林の所有者で、百姓としては珍しく書を読むことと、正道に物を見るだけが取柄である。

義務教育程度の学校教育だけを受け、社会的には悪視酷遇は受けず、宗教的には極重罪惡下々凡々の一肉塊に過ぎないし、法律的には前科もない人物としてとらえられている。この平凡な百姓弥之助の人物像は、ある面から照明を当てれば、介山の実像と重なり合うところがある。

百姓という語については、第六冊「日本百姓道の巻」に、一巻を費して詳述されているが、つぎのような表現がみられる。

この宋淵坊は「百姓弥之助」の名をよしとはしない、ある時、百姓弥之助は、こんな事をざれ書きしたことがある。

弾斥

中川宋淵坊は

よく我輩に聴従するけれど

「百姓弥之助」の

字面を見ると

百姓の資格はない

百姓の資格は無い

と云って

我輩を弾斥する

大菩薩峠に建てられた三界庵<sup>注五</sup>の二代目庵主となった中川宋淵坊

に批判されているのである。生産者としての農民を百姓というところを方をすれば、農地を小作にまかせ、住居の周囲の僅かばかりの農地も農作業の若者の手をわずらわせる百姓弥之助が、百姓の資格がないといわれることになるのは当然であるが、このことについては、つぎのようにみようとしている。

これ等の人達は、まだ百姓の大乗的意義に徹していないのは不憫なものだが、百姓弥之助は、そういう理窟無しに自分の肩書として「百姓」の二字程ふさわしいものは無いと考えて居る、何となれば「百姓弥之助」の名乗りをすればそれで万事が足りる。

というのである。そして、その理由として、

この肩書の上には何も乗らない事が妙である、例えば「公爵百姓

弥之助」ではおかしくて仕方がない、「陸軍大将百姓弥之助」でも、

「海軍大将百姓弥之助」でも、どうもくつつかない、「総理大臣百

姓弥之助」も笑い草の外にもならないし、「農林大臣百姓弥之助」

でも菅笠の上へシルクハットをかぶったような事になってしまう、

「文学博士百姓弥之助」もヘンだし、「農学博士百姓弥之助」では萱葺屋根の上へ文化住宅をのつけたようになってしまふ、どんな肩書をもって来ても、百姓の上へのつけると、チグハグになってしまふか、または滑稽化してしまふ、そこに、「百姓弥之助」の名前の持味の独特性がある。

と考えるのである。これは、序文の百姓弥之助の紹介にみる、「官禄の一銭も身に受けていない」ということと、同一の視方であり、介山自身の生き方と重なっているところである。介山は、つねに、権力との間に対峙の関係を持って屹立しようとした面を持っていた。第三冊「土を読むの巻」でも、日本文学が官辺の援助を受けていないことのすぐれた特質をとらえているが、さらに、介山の作品の中断に何らかの影響を与えたと考えられる、大日本文学報国会の入会拒否の事件など、介山の生き方の基本が露頭を現わしていると見ることができるところで、序文には、この作品の成り立ちにかかわる重要な発言が、さらに続いている。

「百姓弥之助の話」はこの男が、僅かに一町歩の天地の間から見

た森羅万象の記録である。これこそ真に「葎の蕊から天上のぞく」小説中の小説、嚙語中の嚙語と云わなければなるまい。

この場合の小説とは、ノーベルの訳語で、フィクションとも呼ばれる近現代文学におけるジャンルではなく、古典的な意味における小説に近いと考えたほうが適切だろう。この場合の小説とは、俗世間でのきごとなどをおもしろく語った話だ。中国六朝期の志怪小説、唐代の伝奇小説、それと並ぶ宋代の白話の小説などの中国古典における小説の呼び方に近いものとみられないこともない。「森羅万象の記録」ということには、フィクションの意図はないのだ。江戸いろはがるたの一句で、視野の狭さをたしなめることばを修飾句としている小説である。これは、天下国家を論ずる正論に対して、市井の話題に属するものだ。うわごとであり、とりとめのないことばだという宣言である。

百姓弥之助の、現実には徹した生活記録とも云えるけれども、要するに小説中の小説であり嚙語中の嚙語であることは、重ねて多言を要しない。

と、「現実には徹した生活記録」とし、「小説中の小説」「嚙語中の嚙語」と短い序文の中で、このことばを二度繰り返し断っているとい

うところに、この作品の意図を深読みするのは誤りだろうか。ここに開き直った、そして斜に構えた著者の姿勢が読みとれないことはない。ここは、

「大菩薩峠」は、材を日本の幕末維新の時代に取った一つのロマンスであるとすれば、この「百姓弥之助の話」は、日支事変という歴史的空前の難局の間に粟粒の如く置かれた百姓弥之助の………生活記録………。

となっていて、「大菩薩峠」と比肩させているところに、著者の意気込みが感じられるのである。

介山は、小説『大菩薩峠』を語るときに、常に自負に充ちている。一言も他人の容喙を許さない厳しさがある。

ここで介山が『大菩薩峠』と並べて『百姓弥之助の話』を語ることは、それ相当の覚悟があって、筆を執っていることをわからせるのである。世俗の物語としての小説、無責任な放言としての嚙言と、低い次元のポーズを示しながら、しかし、予想する聞き手たちの読みの深さを期待していたといえるのである。

小説『百姓弥之助の話』は、一九三七年（昭和十二年）の秋<sup>注六</sup>から、一九四〇年（昭和十五年）夏までの三年余にわたって書かれ、七冊が刊行された大著である。

第一冊は「植民地の巻」で、主として、東京都下、羽村での農耕生活、時勢の移り行きが記録されている。

出征兵士見送りの行列や列車で偶然乗り合わせた応召兵、新宿追分での軍隊の出陣風景など、日支事変頭初の国内の見聞が語られる反面、野良猫の飼つけ失敗の話なども点散する。ドイツ軍のオーストリー侵入の記事に関連して、帝国主義国家間の植民地争奪と、弥之助の植民地の質的な違いを述べ、南北の米大陸の植民意識の差異と今日の両大陸の文明度の相違などにも言及している。

炭焼きや正月料理、自炊生活など、身のまわりの雑多な物語りもある。

昭和十三年、春彼岸の序文を持っているが、文章は、武蔵野の秋の風景とできごとから始まっていて、昭和十二年、秋の執筆開始であることがわかる。四月に刊行され、約六ヶ月間の事象が記録されている。

第二冊は、「塾教育の巻」で、主として、西隣塾での塾経営に失敗した経験を中心に、市井の教育の問題、教師界の回顧などを描いている。

明治期の弥之助の小学校での児童教師の思い出、塾教育の歴史、教師生活、現在（作品の当時）の教育の歪みなどが語られる。松下村塾や福沢諭吉の『福翁自伝』での適塾、熊沢蕃山などの話もあり、介山の西隣塾での失敗を百姓弥之助の塾教育の失敗談として、五項目による反省<sup>注七</sup>がなされて、農業による、商業による、印刷出版による塾経営の経済的基礎づくりの抱負などが試みられたことを記している。

弥之助の小学校代用教員時代の餓鬼大将振りや独特の「話」ストーリーテリングの話題などはことに興味深い。ほかに、展覧会や映画、スポーツについての描写や評価などがある。

これには、巻末に「百姓弥之助が、第一冊「植民地の巻」に引きつづき、この第二冊「塾教育の巻」を校了したのは、昭和十三年（西暦一九三八）の六月入梅の日であった」と記しており、二ヶ月で一冊を書き上げることがわかる。昭和十三年六月に刊行されている。

第三冊は、「土を読むの巻」で、第二冊の巻末に「百姓弥之助は入梅に打ち込んで麦の取入れが捗らないことを最も苦にしている。麦の取入れが終ったら、第三冊「土を読むの巻」に取りかかりたいと心構

えをしている。」と予告しており、巻末には、「昭和十三年六月十七日起稿——八月二十九日 武蔵野植民地に於て 稿了」の記述があつて、二ヶ月余の日数を要していることがわかる。介山の筆勢は、おおよそ、二ヶ月余で一冊のスピードであつたとみていい。

「土を読むの巻」は、長塚節の小説『土』を読んでの感想を中心に文化問題、文学の問題、農業関係の書籍を読んだ感想などが述べられている。

百姓弥之助が小説『土』の朝日新聞連載当時を持った反感が蒙味であつたことの反省と、『土』についての賛意、評価が語られている。日本文学が官辺の援助、保護から独立して、民間の力によって日本文学史を形成したことの特異性の主張<sup>(注六)</sup>は、納得させられるものがあり、近代文学史の視点としてもおもしろいものがある。小説『土』への評価も、明治文学史のとらえ方も、介山の文学者としての視点をよく了解させられるものがある。

ほかに、雑誌『富民』の「大陸農業放談」や『徳政再吟味』、大河内正敏の『農村の工業と副業』、権藤成卿<sup>(注七)</sup>『農村自救論』や、古写本『明和伝馬騒動記』などの本を読んだ感想が記されている。

また、田川大吉郎<sup>(注八)</sup>を久しぶりに訪ねて、田川の中国行き<sup>(注九)</sup>の目的から、アメリカなどは七千人の宣教師を中国へ派遣し、多年、中国文化のために永久的に働いていることを知らされて驚いたりしている。

第四冊は、「イワンの馬鹿の巻」で、トルストイ論とでも呼べるもので、予告には、まさに、そうであつたものである。巻末に昭和十三年八月八日起草——十月五日稿了」と記されている。第三冊の稿了が八月二十九日であるのに、第四冊の起草が八月八日となつていて、その間に、両冊の執筆が同時進行のようになってゐるのは、「百姓弥之助が信濃高原に籠つて、この一冊と次の第四冊「イワンの馬鹿」の大半を書き了えて植民地に帰つて……」と第三冊の末尾の節に書いていふことで、第三冊は、早く、あがつていたのに、植民地に帰つて二つの悲痛なできごとがあつたと書いていふことから、第三冊には、あとで書き加えがあつて、日付がおくれていることを納得できることになつてゐる。

第四冊は、トルストイの非戦論からはじまつて、トルストイの作家としての歩み、「吾が懺悔」から「我が宗教」への脱皮、トルストイの農民生活、「イワンの馬鹿」の弥之助による翻案一編が書かれていふ。

ほかに、介山の著作権についての考え方、アジア、ヨーロッパの戦線状況、などがあり、パールバックの『大地』と長塚節の『土』の比較なども語られている。

第五冊は、「国民皆農論の巻」で、ユートピアンとしての介山の世

界観がよく現われている部分である。国民すべて一定年令、一定期間、徴兵と同じように農業に従事させる制度を考える巻である。国民皆農は国民皆農と呼んでもいいのである。

昭和十三年十月二十日の夜、炉辺談話、百姓弥之助と対客二人、筆記生で交される国民皆農への段取りがはじまる。

「徴兵」ハ国防ノ戦士ヲ作ルヲ以テ目的トシ

「徴農」ハ平和ノ戦士ヲ養成スルヲ目的トス

ということから、農業の優位性を説くのである。そして、国民皆農が成立した時期の農村事情の日記が綴られるのである。ここに弥之助の農本主義の夢が語られ、ユートピアの像が結ばれている。

なかには、ソ聯の農業問題を論じた在ソ聯大使館の一等書記官の報告など、労農ロシアが農業国営につまづいた事実と国民皆農論について考えたりしている。

ほかに、介山の『池谷廉一の死』<sup>(注10)</sup>について述べた朝日新聞の「大衆作家中里介山」の表記への抗議、小説『大菩薩峠』の隣人社新定版に、改訂し残されていた差別字句へ、中央融和事業協会が示した動き、それについての弥之助の考えなども記述されている。

またジャーナリズムへの弥之助の目は鋭く、「今日この物質節約、電力不足の世の中にどうしてあままでして官民合同で白昼大びらに奇席を開いて、有頂天にならなければならぬのか、真に複雑怪奇な存在

ではある」と、NHKラジオ放送については手厳しい。

これは「昭和十四年二月一日起草——十月六日 稿了」の記述があり、九ヶ月を要しているが、六月から七月へかけてのアメリカ合衆国への視察旅行を間にはさんで、執筆がはかどっていないことがわかる。昭和十四年十一月の刊行である。

第六冊は、「日本百姓道の巻」で、主として、「百姓」の字義から、百姓についての歴史、為政者と農業との独特の関係史とも呼べる記述である。

書経堯典の「平章百姓 百姓昭明」という文章から解き出し、日本書紀推古記などにより、聖徳太子十七条憲法での「百姓」という語と、その後の歴代天皇と百姓という語の関りを詔勅などによる表記を通して記述している。

日本書紀三十巻、持統天皇までの詔勅には天皇が直接「百姓」に呼びかけた箇所が七十四度に及び、「百姓」が農夫専門の傾きを帯びたのは平安朝半ばであるとしている。

武家覇権期、源氏、平家、北条、足利の百姓に対する政策、「貞永式目」「信玄家法」、秀吉の検地、徳川「慶安御触書」<sup>(けいあんおふれがき)</sup>に触れ、徳川期の諸大名の農業政策、経政家、農学者、義農に及んでいる。そして犬養木堂の「平民」に至る。

また、さきに述べた百姓弥之助の名の意味を考えたり、電力などの統制、漸く顕著となりはじめた物資欠乏を語り、読書の感想を述べている。

これは、「昭和十五年二月一日起稿——三月二十日 稿了」と巻末にあり、四十日程で一冊を書き上げている。四月に刊行されている。

第七冊は「リンコン角度の巻」で、書き出したのは、昭和十五年五月二十一日と巻頭に述べている。この時、ドイツのヒットラーによって一年の間に、オーストリー、チェコ、ポーランド、<sup>スウェーデン</sup>瑞典、<sup>ノルウェー</sup>ノルウェー、<sup>デンマーク</sup>デンマーク、<sup>ベルギー</sup>ベルギー、<sup>フランス</sup>フランスの仏蘭西のマジノ線を突破、<sup>パリ</sup>パリ危し、<sup>英本土</sup>英本土侵入目近かという時期だと記している。そして、この冊の十一章の執筆中の六月、パリは独軍の手に陥ちていることをそこに記している。こういう時期「ヒットラー角度」とか「ムッソリーニ角度」とせず、「リンコン角度」から物を見ようとするについて一家言のあるところを示しているのである。

昭和十四年のアメリカ合衆国の視察旅行に負うところが大きく、百姓弥之助はリンコンを身近かな伯父を見る心地でリンカーンの事蹟を追っているのである。リンカーンは、フランダーズの野で連合軍を破ったヒットラーの夢に現われ、また、百姓弥之助の夢にも現われる。

ホイットマンとリンカーンの関わりや、オットー・アイゼンシムル著『何故にリンコンは暗殺せられしや』<sup>注(二)</sup>の紹介がある。また、

アメリカの大戦参加の可能性、日米戦争の可能性にも及んでいる。

巻末に、これまで七冊の一応の総括があり、第八冊の予告をしている。「『百姓弥之助の話』の出版」

「擱筆の日はあたかも昭和十五年（一九四〇）八月十日のこと、信濃西来荘のバラックに於いてこの稿了る」とあり、「尚この綜合小説『百姓弥之助の話』第一冊の発行は昭和十三年の春に始まり、今年はその第三年目、日支事変の進行と略ぼ時を同じゅうしている」と述べている。

そして、続いて、アメリカの日本人植民地の農業視察記が、八章にわたって書き継がれている。

小説『百姓弥之助の話』は、以上七冊であるが、この小説が一体、どのようなジャンルの作品であるか、判然しない。第八冊には、綜合小説という新しい呼び名を与えてはいる。が、百姓弥之助の身辺雜記、時局論、文学論からジャーナリズム論、海外視察旅行記もあれば、翻譯小説、正しくは翻案であるがこういうものまで、雑多な作品を盛り込んだ作品を何といったらいいか。「綜合小説」とは何か、という定義はない。あらゆるものを投げ込んだ得体の知れない、俗世間の話を詰め込んだ物語というより、定義のしようはないが、すべてを集めてある小説という意味では何とはなしにわかるような気にもなる。



介山はもともと厳密に区分けをして分類するという方向にものを考えるタイプではなかった。そこにあるものを、丸ごと受け取ろうとするのである。介山は小説『大菩薩峠』についても、

この小説全篇の主意とする処は、人間界の諸相を曲尽して、大乗遊戯の境に参入するカルマ曼陀羅の面影を大凡下の筆にうつし見んとするにあり

と述べている。すべてのもののある姿を隅々まで細かくとらえ尽くすという意図があり、時間の流れまでも包み込んで全円的な把握を指すものである。

『百姓弥之助の話』は、序文のいう、「日支事変という歴史的空前の難局の間」の「現実

に徹した生活記録」という枠組みを一応与えられている。しかし、その「生活記録」の意図するところは、さらに深遠なところから発していたことを知らなければならない。

第七冊「リンコルン角度の巻」十五章はつぎのように書き出される。

本編即ち『百姓弥之助の話』は、本来自分の身边記を以て終始の要素としなければならない理由と必要とが存在するのである。

この作品の内容、構成、そして、意図が明確に存在したことを語っている。常に身边雑記でなければならない理由があり、必要があったことを述べているのである。それはどういふことか。

百姓弥之助が古来の歴史を読む毎に最も不足を感じるのは当時の百姓（即ち人民）の生活ぶりが、殆ど書かれていないという事であった。

関ヶ原の大合戦がどうであろうということは、委しい記録が残されている。各大名の陣立、家々の旗差物、将士の鎧のおどし糸まですっかり解るけれども、当時の軍糧を供給した百姓達の生活ぶりやその戦争に対する物価や交通機関の事は殆ど居るされて居ない。また権

力の争奪に関係のない率直な沿道民の時局観などは殆ど解らない。権力の側よりは、被支配者の側、民衆の立場にことさらに関心を持ち続けた介山の当然の発言である。小説『大菩薩峠』で、好事家の町

医道庵らが、関ヶ原の大合戦の模擬戦を演ずる部分があるが、凝り性でもあった介山が関ヶ原合戦の資料を渉猟した経験から出ている切実さがある。

歴史とは、もともと、際立った事実の記述であって、影の部分は切り捨てられるものだ。晴れの場が記憶され、曇りの場が忘却されるのと同じことだ。しかし、現実の重要部分は、曇りの場でなければならぬ、それがなければ晴れの場は虚妄である。歴史の記述の中に、人民の姿が照明を掛けられたのは、それ程以前からのことではない。それは一九四五年を境とした戦後のことに属する。

『百姓弥之助の話』の中の発言は、天皇史観、英雄史観にがんじがらめにされていた季節のもとでのものである。そこには、支配層の姿だけが鮮明に描き出され、人民はその影にひっそりと目立たずかくれていた。図柄を引きたてるための地すらでしかなかったともいえる。しかし、実生活者の人民はしたたかに生き続け、世の中を支え続けるものだという考えが介山にはあった。展覧会の特別招待をうけるよりは、一般の観覧者と肩を触れ合っただけを望んだ介山の考え方があつた。介山の関心は人民の側により強いのである。

江戸末期になってから文筆が平民的になり旅行随筆のすさび、落首、狂歌などを見ても、そういう方面が非常に解るようになって好

資料が多分に残されている。ところが、最近新聞雑誌の大発展、所謂ジャーナリズムというものの全盛につれて、不思議にも書くことが一定されて、人民生活の真実の記録が失われようとしてつたある。

日毎月毎に印刷機械はすばらしい勢いで運転するが、その現わされた文字を見ると大いある機関の供給と御用とに局限されて独得の真実描写からいよいよ遠くなって行く。

一九三〇年代後半から四〇年代前半、昭和十年代なかばのことだ。日支事変、中国から言えば抗日十五年戦争の真最中である。戦時中のジャーナリズムのあり方に対しての真向からの痛烈な批判である。そして、それはまた戦争遂行者、為政者への批判でもあったのである。

そこで百姓弥之助は努めて自分を中心としての世界の大勢がもたらす波動の影響を記録にとどめて後代に残して置き度いものだと考えている、これはこれ、普通世間の自叙伝の行き方とは違った動機から出ているものだ。

百姓弥之助が自分の身辺記録を書き続ける意図がどこにあったか、その理由と必要が語られている。そして、『百姓弥之助の話』を通して、介山が語りたかったことが明確にされているのである。

介山のこの発言は、一九四〇年（昭和十五年）夏のことである。

#### 四

百姓弥之助が自分の身辺雑記を綴り続ける理由と必要は、当時、日中戦争の時期に、公的歴史観である天皇史観、英雄史観の記述から抜け落ちていくであろう人民生活の真実の記録の一つとして書き残すことにあった。

その人民生活の真実の記録というものはどのようなものであったか、いくつかの例を抜き出して提示しよう。そこには、東京近郊の農村の生活や、第二次世界大戦前期の世間の動向が描かれており、それを真実の記録として評価する百姓弥之助の考え方が表われることになる。そして、百姓弥之助の行動と主張と理解を通して介山が語りたかったことが明示されることになるはずである。

百姓弥之助の身辺雑記だから、当然、偏りがあり、極限される。しかも、その中の一部をわたしの好みで抜き出し、解説するとなると、さらに偏りはひどくなるだろうということを断っておきたい。できるだけ

作品の叙述を通して語らせるようにしたい。

『百姓弥之助の話』には戦争論を読むことができるが、その冒頭、第一冊「植民地の巻」の巻頭は、まさに象徴的である。

百姓弥之助は、武蔵野の中に立っている三階艶消ガラスの窓を開いて、ずっと外を見まわした。いつも見飽きている景色だが、きょうはまた馬鹿に美しいと思った。

秩父連山雄脈、武蔵アルプスが西方に高く聳えて、その背後に夕映の空が金色にかがやいている、それから東南へ山も森も関東の平野には今ぞ秋が酣である、弥之助のいる建物は武蔵野の西端の広っぱの一戸建の構えになっている。南に向いている弥之助の眼の前は畑を通して一帯の雑木林が続いて、櫟檜を主とする林木が赤に黄に彩られている、色彩美しいと云わなければならぬ。

一九三七年（昭和十二年）秋である。武蔵野の植民地は、百姓弥之助が生きて思索する場である。この描写に続いて周囲の地勢が描かれる。そして、時代を示すできごとが展開する。

さて、百姓弥之助はいつも見飽きているこの植民地のような風景が、

今日はバカに美しいと感じながら、暫くボンヤリと眺めていると、崖の本村の方から楽隊の音が聞こえて出出してゾロゾロと人が登って来る、続いて軍歌の音が送り出されて来る。

天に代りて不義を討つ

忠勇無双の我が兵は

歓呼の声に送られて

今ぞいで立つ父母の国

……

続いて笹付の青竹に旗幟の幾流が続々と繰り出されて来る、村から停車場へ行くこの道は、早くも蜿蜒たる行列が曳き来られて来た。

出征兵士見送りの行列である。昭和ヒトケタ以前の老人たちはいまだに克明に記憶しているはずだ。それを忌まわしいと思うが、懐しいと思おうが、いずれにしろ、忘れられるはずはない。この出征風景を  
見ている弥之助は何を思い、それをどう書きつけたか、だ。

百姓弥之助は、その光景をじっと見て吾に返った。

「また、きょうも出征者だな、家の若い者は誰か見送りに出たかな」と思いながら、立ちくつしている、聞くとはなしに軍歌の音が耳

に流れ込む、そのうち彼はなんとなしに自分が幼少時代に見慣れたお葬式の行列のことを思い出した。

古い記憶が甦って、葬式の行列のことが描き出されてくる。そして、続く。

今出征兵を送る一行を見て、弥之助は四十何年も昔の葬式の事が何となしに思い出されて来た。あれとこれとは決して性質を同じゅうするものではないが、ただ、聯想だけがそこへ連なって来た、勇ましい軍歌の音が停車場に近い桑畑の中から聞えて来る。

勝たずば生きて還らじと

誓う心の勇ましさを

或は草に伏しかくれ

或は――

それを聞くと、昔のなあーんまいだぶつーが流れ込んで、高く

登る幾流の旗を見やると、

「生き葬い！」

斯ういう気持ちが犇々として魂を吹いて来た。

日支事変と呼ばれた戦争が始まり、拡大の方向を見せはじめたばかり

りの時期である。赫々たる戦果といういい方で戦意が昂揚させられていた時代だ。北支事変という名で限定されていた地域侵略が、上海へ広げられていく、勃発後半年たらずの時である。まだ多少の誇張はあったとしても、まだ大本宮発表の欺瞞ほどではない報道のもとで、国民はこぞって天皇の軍隊の戦捷に酔わされていた時分である。

昭和十二年夏、八高線<sup>注(三)</sup>の列車の中で、高崎の聯隊へ召集される相当年配の応召兵と乗り合わせたことを、弥之助は思い出す。

年功を経た応召兵達の胸を打割った正直な述懐を聞くことが出来た、この辺の本当の土着の農夫としての一人は「もうこれだけにして貰えば思い置くことはない」といって、正直に感動をしているが、或る技術学校の教師をしていた人だの、東京の下町で然るべき炭薪屋をしながら社大党に属して日頃注意を受けていた人だの、そういう人はかなり立入って自己批判をした、然し、斯ういう本当の土着の農民もインテリ性を帯びた都会からの帰還入営者も、何等の不平なく国の為に殉じて行くその従順な姿を見ると、日本国民は全く世界無類の忠良な国民だと涙を吞まざるを得なかった。

土着農民の単純率直な感動や都市住民でインテリ的な人、政治的洗礼をすでにうけた人の自己批判など、国の難局に殉ずる思いで語られ

る従順さに、弥之助は「涙を吞まざるを得ない」というのである。この三十代半ばの応召兵たちとは、異った立場で見ていることになるわけだ。彼らの発言に理解と同情を持ちながら、もっと違った地点に立っているということになる。だから、続いて、こうなる。

それと同時に、斯ういう忠良無比なる国民、妻もあり子もあり、世帯もあり分別もあるこの国の中堅の良民を召集して鉄砲の前へ肉弾に送ることに於て、当路の責任者は最も深刻にこの国と人を誤らせてはならないという感じを弥之助は<sup>ひしひし</sup>胸に焼きつけられた。

この応召兵たちは、三ヶ月後のいまだどうなつたらうと、百姓弥之助は考える。

この村でも、最早毎日のように出征兵が送られて、二十人以上にも達している。

上海<sup>シャンハイ</sup>に於て戦死者が一人、負傷者が一人、出たとの事である、それから、この村の人ではないが先程まで、この村で小学校の教鞭をとっていた青年教師が一人これも上海で戦死したそうだ。

これらのことが、弥之助が三階の窓から出征兵士見送りの行列を眺めながら感慨にふけた事柄であった。

日支事変の勃発直後、百姓弥之助が、この戦争をどううけとめたか、その一部分がここにある。国の政策そのものへの直接的な言及はないが、その被害を受ける民衆の側からの批判が見られないことはない。

そして、一年後、第三冊「土を読むの巻」の中に、余談に属することだが、同じことを思い起す一節が挟まれている。

去年の夏(注三)は、この駅(注四)のあたりから、出征兵の送迎が多かつ

た。……あの時の出征兵は、皆二十歳以上で家族をもち、独立した職業をもった人ばかりであった、そうして座席の大部が、それ等の人で占められたから、皆それぞれ思い思いの打明け話を可なり立入ったところまで明かし合ったのを、それを、弥之助はしみじみと聞いて居た。

相当年配の応召兵たちが、家族からも職業からも切り離されて、「鉄砲の前へ肉弾に送」られることに「涙を呑んだ」弥之助だったが、すでに相当の月日が経過している。

あれから早一週年である、あのうちの幾人の人が生きてなお戦場

に働き、尚また幾人の人が死して護国の鬼となったか、尚また、この一年の間に幾人の寡婦かぶ孤児が出来たか。そういうことは一こう解らないが、ここを通り合せると「古来征戦幾人還」の感が深からざるを得ない、だが時局の進展はそういう感傷にふけらせるとまを与えないで、今もなお、続々見送りの喚呼に護国の熱誠が燃え立って居る、

名譽の戦死という美称で、真情を吐露することもできなかった時期であった。これは、冒頭の第一冊、「植民地の巻」で、住いの三階で、

「生き葬い」を見送って、その場で感慨に耽ったなかでの思いから、一年後ということになるが、第一冊の同じ巻ですぐ続けて、すくなくとも、昭和十二年冬、日支事変勃発後半年のことに当ると思われるが、中央線の電車の中で出合った青年との立話で、上野の美術学校（東京芸術大学の前身）出身者で十五人召集された内、五名は戦死、という話を聞いて、弥之助は口を結んで考え込む。

美校出身だけでも十五、六、七名の出征者のうちに死者五名と云う事であれば少なくとも三分の一が死んで居るのである。

肉弾、肉弾、全国を通じての肉弾の貴重すべき犠牲は外で戦われて居るから内なる人の日本人の実感にこたえる事が甚だすくないのではないか。日本現在を斯くも安らかにしているのは、皆、外に戦っ

ている肉弾のお蔭である。

弥之助の戦争への認識はこの程度のものでして描かれている。しかし、戦争で殺される犠牲者の立場に密着しようとする姿勢である。続く、昭和十二年十二月の東京である。

久しぶりで東京見物をしてかなり町並みを歩いて見たが、なかなか物資は豊かでちつとやそつと戦争をしたからとて影響などは更に見えない、

戦争半年、東京の町には、戦争の影は色濃くない。泰平だといえる状態だ。

東京の一角へ爆弾の一つもおっこつて来るといふ日は別だが、今時は何処に戦争がある、といったような風景である、これというのも、彼の壮烈なる肉弾の賜である。

侵略戦争とか、帝国主義の植民地争奪とかいうことよりは、銃口にさらされる生身の人間からの視点に依ろうとするのである。

これで、出征兵士見送りの行列に、「生き葬い」を感じとり、中年

の応召兵の打ち明け話に「涙を呑む」ことになるのである。これは一種の実感主義だ。実感主義は動揺しやすく、ひ弱なものだ。だが、根深いものでもある。弥之助は動揺する。

新宿追分で戦地へ向う野戦砲兵の一隊を見た時だ。

百姓弥之助は植民地に居ては村人に送られる出征兵とそれを送る村人の行列を見て心を打たれたが、東京の地に来て真剣に武装した日本軍隊と云うものを眼のあたりに見ると彼はまるで送り迎えの時の感情とは全く違った心の底から力強い感激の湧き出る事を禁ずる事が出来なかった。

「生き葬い」を直感した弥之助は文字通りの真剣に武装した日本軍隊に感激してしまうのである。この日本軍隊が何をしようとしているのか、どのような役割を担っているのか、は見えなくなってしまふのだ。素朴な農夫が、善良な市民が軍隊という組織の中に組み込まれたとき、どう変化するか、目の前の生動する姿に眩惑されてしまつて、その本質が隠されてしまふことに思い到らないのである。

武装した日本軍隊は身の毛がよだつほど厳肅壮烈なものである、威力が充実し精神の気がみなぎって居る、殊にこれから戦地に向う

と云う完全武装した軍気の中には触るるもの皆砕くと云う猛力が溢れ返って居る。村落駅々から見送られて出る光景には慥かに一抹の哀々たる人間的離愁がただよっていないという事はない。すでに斯うして武装した軍隊を見ると秋霜凜冽、矢も楯もたまらぬ、戦わざるにすでに一触即発の肉弾になりきっている。

だから出征の勇士は全く本望を以て死ぬ事が出来る——  
田園から、街から、職場から召集された兵士たちの忠良さに「涙を呑んだ」弥之助はここにはいない。日本軍隊の威力に圧倒されている弥之助がいる。

しかし、弥之助は直ちに、軍国主義に賛同して、日本軍隊のバンザイを叫ぶようになるのか、というところはわからない。生身の実感、弥之助の心情を支え続けているのである。本人は「本望を以て死ぬ事が出来る——」としても、である。

ただままたらないのは戦終つて後その士卒を失った隊長、昨日迄の戦友と生別死別の同輩、それから残された遺族等のしのぼんとしてしのぶあたわざる人情の発露である。

ということになる。

そして、第五冊「国民皆農論の巻」に、何年後か、何十年後にか、国民皆農が成立して植民地のある村の村長となった弥之助が靖国神社へ詣ることが描かれている。

昭和十四年六月七日にアメリカ合衆国へ視察旅行に行き九月中旬に植民地に帰って書き継がれた部分にある。

国民皆農が成ったユートピア村の状態が日記体によって綴られる。九月下旬のある日からの日記、五日目のことである。

百姓弥之助はフト靖国神社の前を通りかかった、……

百姓弥之助は境内を進んで行って、神社の鳥居外でうやうやしく拝礼して居るうちに感激の涙があふれ返って来た。

嗚呼、日本の今日あるはこの英霊の賜である。

靖国神社の境域の拡張、民衆的になった建物、記念館、観覧物などが紹介されたあとで、弥之助はうやうやしく拝礼して涙を流す。そして、思い起すのである。

思えば日支事変から引き続いて、ドイツとポーランドの争いをきっかけに繰り返された世界第二次の大戦争の如何に痛絶惨絶であった事か、そういうことは今思い出すに身の毛がよだつばかりであつ



た。一時は人類が獣類に逆転し、その築いた文明というものが悉く壊滅し、人間その者も地上から絶滅してしまうのでは無いかと思われた、人間というものいかに愚劣浅薄な存在であるかに絶望せしめられた。

これは、昭和十四年九月の筆である。

日本のハワイ真珠湾攻撃に先んずること二年以上も前のものだ。これが百姓弥之助の想像力の問題である。当然、弥之助は、戦争の結末が米軍の空襲による焦土作戦による都市の崩滅、原子爆弾による広島長崎の蒸発など惨憺たる敗戦であったことには思い及ばないのであるが、弥之助のユートピアンとしての想像は、この昭和十四年という時点としてみるとおもしろい。戦後処理によって、

その結果、東洋は大体に於て日本がリードし、支那は支那としての面目と本色を充分に發揮することが出来るようになり、ヨーロッパはヨーロッパとして政治的には一種の聯邦制が成立って、各国共にその歴史と面目とを毀損すること無しに平和の政治体制が確保せられるようになった。

となり、日本は敗戦ではない。むしろ、日本は戦勝国と想定されて

いる。

北米は合衆国がこれを押えてカナダは英国の勢力地であり行く行くはヨーロッパ本国を、歴史的発祥の生誕地として置いて、カナダに国民生活の主力を置くような体勢になって居る、その他、インド、アフリカ、南米、濠洲等、各各独立の実力あるものは独立せしめ、国の小なるものは意地を捨てて或は併合し、或はその好み親しむ国と提携する

カナダについての予想はうまく当たっていないが、その他の第二次世界大戦後の方向は、誤っていない。インド、アフリカ、南米、濠洲等、独立するものは独立させると言うが、その独立はそれ程安易ではなかった。

それから世界各国が一様に国民皆農主義を施行すると同時に、軍備というものは警察程度に縮小されてしまった、植民は何処の国へ誰が行っても自由であるかわり、必ずこの国民皆農の主義に従わなければならぬ、

まさに、ユートピアンの楽天性だ。弥之助が、どういう農本主義者

であるかということ、また項を改めて説かなければならないのだが、近代社会が、こうも安易に国民皆農に転換可能であると想定するとともに、楽天性が見られるのだ。

軍備制限が本心の自覚から起って来た以上、その制限、実行も規約も徹底的に守られて、二度と大戦争勃発の危険は、ぬぐうが如く改消された、

ユートピアンの希求は、政治や軍事の力の問題を安々と解消する。

現代のわたくしたちは、軍備制限が如何に困難なものであるか、一九〇年代の現在の米ソ交渉の経過などからよくわかるのであるが、一九三九年（昭和十四年）九月という時点にかえせば、この発想は、抜群のものであったと見ることもできるのである。この弥之助の理想社会の実現は、

斯ういう時代が生まれて出たのも、彼の大戦争の賜たまはであるとするれば、何を置いてもあの戦争の犠牲となられた幾千百萬の英霊に向って無限の感謝を捧げなければなるまい。

となっていく。

百姓弥之助は、これから一年後、昭和十五年、第七冊「リンコン角度の巻」を描くときには、戦争についての見方は厳しくなる。

戦争というものは、常に戦争を生むものである、宣戦を布告する時に、ドコの国でもその国の正義と、世界の平和の為の戦争という意味を謡わぬことはない。自分は侵略者なり征服者なりと主張して戦うものは無い、その最も顕著なるは前の欧羅巴大戦争（実は世界大戦争）であるが、これが人類最後の戦争であるというような宣言の下に行われたが、その反証は最近の独逸の復讐戦と次いで来るべき更に大規模の戦争の実現が雄弁に物語る。戦争というものには必ず復讐が伴う、平和の為の戦争ということは火を以て火を消さんとするようなものになっている。

そして、「戦争が結合を齎もたらした唯一の実例」としてアメリカの南北戦争を挙げるのである。最近の「独逸の復讐戦を次いで来るべき更に大規模の戦争の実現」という予言は、まさに的中して、第二次世界大戦を讀んでいたことをわからせる。

## 五

『百姓弥之助の話』が弥之助の身辺雑記であるとすれば、その当時の生活や世相が描き出されているはずである。その部分を拾おう。

昭和十二年（一九三七）十二月、東京の町並みはまだ明治時代の気分が残っている。

万世橋<sup>注二五</sup>へ来て見ると昔の柳原通り、明治以来の名残り、古着

屋が相当軒を並べている、店の先へ出張って客引をつとめるやり方は以前と変わらない、電車通りへ出ると、東京着物市場がある、所謂柳原通りは洋服屋だが、この市場は和服を主としている、それから小伝馬町、人形町通りを歩いて茅場町から青山行のバスに乗って東京駅で下車して丸ビルを見た、丸ビルの店がかり、いつもと変わるころはない。

日支事変が勃発して半年近く、東京には激しい変化はみられない。

物価が高くなったとか高くなるだろうとかいうが、高いにしても知れたもので、自分そんな窮乏を訴えそうなけしきは夢にも思われ

ない（今時それが見え出すようでは大変だが）。

改装された東京は風情ふんせいというものが欠けておもしろ味のない感じはするけれども、表面見たところでは景氣に変わりはない、国民の一

部が他国で屍山血河を越えているというような風情は少しも見えない、

十三年の春になると、変化が見えはじめる。

日支事変が初まってから当然物価は騰あがり初めた、然し暴利取締りが相当届いてるせいとか、その割に暴騰までには立って居ない、特に農産物等はほとんど価格の値上りを見ない、都会の台所では相当に騰あがって居るかも知れないが、農村の収入としてはほとんどひびいて来ない、

しかし、十三年度になると、列車に乗り合わせた老人に統制によって受けた打撃を聞かされるようになる。軍の装備のために召し上げられた牛皮革の統制によって、失業する靴屋の職人である。

「同業の失業者は三十万人からありますが、何とも救済の道はないては居りません、組合はあるにはありますけれども、何もしては

居りません」

ここで、弥之助は幼な馴染が訴えたことを思い出す。子供相手に木綿物の営業をしていたのが統制にひっかかったのだった。

自分は政治の事も社会のことも、何も知らないが、諸方を放浪した挙句ようやく、ここへ落ち着いてそれでも子供が堅くて、この営業をやり出し、諸方へお得意も信用も出来、一家共稼ぎでやっと細々ながらたのしい生活をして居る、それが、今ぼったりとこういう目に逢わされては、丸で不意打に首をくくられるようなものだ、今後如何していいか解らないと、

弥之助には、なぐさめるすべも言葉もない。そして、靴屋、木綿物屋の零細な庶民を直撃していることを書き記すのである。

政治というものの動向が、ピシピシと個人の手薄いところへ迫って来るのを感じない訳には行かない。

さきに、物価の上昇が農民の収入へまわってこないことを注目していた視線と同じものである。

……今年是小麦が不作でもあるし、こんな時勢だから相当高くなるだろうと思つて居たが、出来秋は四斗一俵十円までは届かず、八円台も割ってしまったが、年を越えてここまで来ると十二円五十銭当りまでハネ上つて居る、一俵について四円も開きがあるのだが、どこの農家でも安いうちに売りつくしてしまつて、ここいらまで持ちこたえて居るのは殆ど一軒もない。

「今年は」とは、昭和十三年、「年を越えて」とは昭和十四年にはいつてということだ。正月用の餅搗を記した項にあるのだから、「年を越えて」は正月早々のことと見なければならぬ。出来秋には、八円台を割つてしまひとは、六、七月のこと、それから半年後、年を越えて十二円五十銭となるが、ここまで持ちこたえられる農家は「殆ど一軒もない」というのである。天候に左右され、長雨で畑で発芽する麦のとり入れの農家の苦勞は、詳述されているが、それが報いられぬ状況に目を向けるのを忘れてはいない。

それが、昭和十五年となると、どうなるのか、弥之助の農家としての収支の中である。

大麦と方は自家用一年間の主食物として貯え、小麦は自家用の外は多少売出すことにしている。小麦の売価は、取上り時に於て、一

俵三等格で十二円五十銭という事であるが、今後の相場の変動はわからない。

小麦の生産者価格は上昇している。昭和十四年産の小麦の価はないが、十三年産の端境期の値段が、十五年産では出来秋の値となっている。農家の経済にも影響は見えはじめていることになる。また、つぎのようなことも記されている。

野菜の相場も中々高い。植民地附近でさえもこのお盆に精霊棚の馬を作る茄子を買い求めたら一個十銭したという、普通の茄子なすで小ぶりなのが四ツで十銭だという。この辺でそれだから、市内の方は思いやられるのである。

ここには、都市庶民への視線のうるおいが見られる。しかし、東京の生活は弥之助には逼迫したものを感じとられてはいない。

四年にわたる非常時とは云いながら、ポット出の弥之助が見たのでは、市内そのものの表面上の景気には、大した変りはない。砂糖とマッチとが切符制になっただけで、多少品が落ちて価が高くなっただけのこと、すべての物は買おうとすれば買えるのである。

ただ、主食、米については、相当の影響が見えはじめていることに感づいてはいる。

八高線の中で、靴屋に同情したときの弥之助は鰻うなぎ丼どんぶりを食べており、米についてあげつらうことはなかった。これは十三年のことに属する。ところが十四年、六、七月アメリカ旅行で、日本の内地米におとらぬカルフォルニヤ米を賞味し、それ以降、外米への認識を改めてはいるが、東南亜の外米とは区別している。昭和十五年になると、このようにいう。

東京市民がこの夏最も悩まされているのは米と水であった。米は外米八割混入というところまで行ったが、この外米が泰タイ国あたりの下等米と見えて、いかにもサバサバしたまじりものである。

また、駅弁についても、観察者らしい興味を示して、つぎのように書くのである。

途中寄居よりいという駅で汽車弁を買って見たら、ここは麦、米混入であったが、高崎あたりは白い米のようであった。ただしどの程度の外米混入か味って見なかった。

さきの茄子の値上がりを語ったあとで、物価の変動の基礎にあるものを、つぎのようにみている。

公定価のある穀類は別として青物類などにも変動のあるのは、主として労力不足の関係かと思う。農村には肥料も不足だが、人が今最も不足している。そうしてこの分での老人子供が無くなると今後はいよいよ不足するばかりであろう。労力対策が最も重要な問題である。

人手不足が基本であるという認識がある。この労力問題は、どのようにとらえられ、変化をみせいかも考えてよかろう。

昭和十三年春、物価は上がりはじめている。その中で特徴的なものとしてあげている。

……俄然として弥之助の耳元にひびいて来たのは人間の値上がりであった。昨年百五十円程度の作男の給料が二百五十円以上にまで飛び上ってしまった、それから昨年四十円の仕込盛りの小供が今年は九十円で他に口があるからと申込んで来た。男の方が約七割、小供の方が十二割以上の値上りである。

それは、何ゆえか。

兎に角支那へ向けて大量の人間が進出して居るその影響がこれも現金にむくって来たのである。これは実に日本の農村の古来未だ曾てなかった一大事件であるのみならず、壮丁の支那進出は、この分ではいよいよ多くなろうとも減ずる気づかいはない、今後の労力の不足はいよいよはげしくなるに相違ない、

事変の影響は靦面にここにみられるというのである。

今、農業に働いている壮丁は、いつ徴集されるか知れない、そうすると一人前に足りない子供の労力というものが、一人前に要求される時期が来たというものかも知れぬ。

それが十三年の麦の穫り入れの時には、はつきり目に見えてくるようになる。

二人の出征兵を出した農家の話である。

綱さんの家では、かんじんの稼ぎ人が、兵に召されている、そうしておかみさんが子供を遊ばせながら、せつせと畑稼ぎをしている

のをよく見かける、麦も少しワセを蒔いて、もう刈取りも手廻しよく出来て、地面へ横たえて乾かし、さあ、今日は裏返しだと云って、子供を一日学校を休ませまでして手伝わせて乾麦の裏返しをやらせて、明日はいよいよ取り入れ、というその明日から今日まで雨つづき、麦はどうとう地上で芽を吹いてしまった、どうにも仕方がない、右に云う通り一年中の労力、一年の食糧がフイになってしまった、本当に泣いても泣ききれまい。

それでも絶望せずおかみさんが子供を相手に畑仕事に精を出すのを弥之助は暖かい目で見つめているのである。

昭和十三年ころにはつぎのようにこのあたりの農村の情勢がみられはじめる。

殊に百弥之助の植民地は〇〇（伏字）<sup>注（三）</sup> 飛行場の飛行機の散歩区域である。軍需品の工場が、その飛行場からこちらへ向けて、ドンドシと立て増されて行く、今迄農業に働いていた青年をはじめ、女子供に至るまで、ドンドンとその方に吸収されて行くから、この農村労力の移動がハッキリして来る。

この傾向は、昭和十四年にはさらに増大する。ある男は、この村か

ら軍需工場へ出勤する青年は一千名と数えるが、別の男たちは、四百人位といい、三百人程度という。弥之助は、先ず三、四百人というところが実数だろうと考える。

それにしても、いちじるしい進出であって、これを書きつつある間にも続々と増加する、是等の青年は皆農業を捨ててかせぎに行くのだから、収入としては、はるかに農業よりも割がいいにしても、それだけ農業の手廻りは薄くなって行くわけである。

軍需工場へ出勤する青年だけではない。

そればかりではない、一般に人力不足から軍需以外の労役でも東京の方へ引っ張り尻になる。それから昨年（昭和十三年）の徴兵検査ではこの村でも適齢者の八割が合格している（この村は戸数約九二〇、人口約五千六百の村であるが）、従来一年十五人出れば驚いたものだが、今年は三十余人の入営者を出している。

徴兵検査での入営者は、主として、二十歳に達したばかりの新壮丁である。人口五千六百の村である。小学校同学年の男子生徒は多くて五、六十名程度一学級の規模である。新壮丁の約半分が兵営に召し出され

るといふことだ。

そういうわけで百姓男の給料がグンと上った、今年（昭和十四年）では四百円以上になっている、昨年度は二百四五十円程度で、事変前は一カ年百円台で、好い男が雇えたものである。衣食を与えて一カ月三四十円の給料を払って、現在日本の農業が立ち行けるかどうか、わかりきった事である。

農本主義者とみられる百姓弥之助は保守的な人間像が予想されがちであるけれども、決してそうではない。合理的、開明的人物と考えられる面を持っている。日支緊迫と考えられれば、中国へ飛んで現場を自分の目で見なければ納得しなかった中里介山の分身である。だから、昭和十四年にはアメリカ視察へ出向くということにもなる。

弥之助は昭和十二年十二月には、つぎのようなことを書きつけている。  
百姓弥之助は昔から自動車を贅品ぜいたくぶとは考えて居ない、行く行く実用品として各戸一台は備えねばならぬ様な時代が来るものだと思つて居る。

これは百姓弥之助の先見性ともいえるものだ。自動車を各戸一台備えるという考えは一九九〇年の現在ごくあたり前のことと、誰もが納得するが、一九三〇年代末の時点で、誰が言えたらう。

しかし、物資の統制は弥之助の車も直撃する。昭和十三年夏。自家用のダットサンには、先々月からのガソリン統制で二十ガロンの配給ということになっていたのが、先月は一ガロンを減らされ、今月はまた十二ガロンに減額されてしまった、東京まで三回半の往復量である——本来我輩の自動車は、生活と離れて考えられない必須品である。

そして、さらに六ガロンの配給となり、

今では一カ月三ガロンのガソリン券しか交附されない事になってしまった、三ガロンのガソリンでは植民地から東京の場末まで辛うじて一往復の料である、これではどうにもならない、これ以上はガソリン券の闇取引をやるか、そうでなければ何か特別のお情けにすがらなければ補給が出来ない、そういう事は百姓弥之助のよくする処でないから車体検査の時に廃車届をしてしまった。



というが、この廃車は十四年六月のこと、車体検査の機会だと別項に記している。ガソリンの統制は、弥之助の生活体系、交通生命線を断った程のことであったという。自動車を各戸一台は備えねばならぬ時代が来ると書いて、一年半後のことである。

また、この時期には、

まだ何処で戦争しているかと思われる位、余裕があって、内地は落ちつき払っているようなものの、次第次第に、物資の節約が必要になり、真綿で締めるように統制がジリジリと進行している。

ということが記される。そして、また、

石炭の供給が少なくなった為に、東京へ出ても自家用風呂の御馳走になることが出来なくなった。釘が買えない為に家屋の修繕なども、ほとんど困る、純木綿物は全く市場に無い、若干乃至全部スフ入りである、五十銭紙幣が新たに発行された、この夏から秋にかけては電力が著しく不足して、電車の停電が頻々、百姓弥之助も、出京した途中、地下鉄に乗って、僅かの間で二度まで停電された経験がある、

生活は次第に厳しくなってくる。

木炭や煉炭も払底して、生産費が償わないと云っている、闇取引ということが可なり公然の秘密に行われているそうだ、捨て置けば今後の物価騰貴の天井が知れない、たまり兼ねた政府は遂に九月十八日の物価釘付勅令を發布した。人間の自然の本能は、物価が暴落すると、さらに厳しくなる。

東京市内では今年の二月半ばから湯銭が一銭値上げの七銭になった、百姓弥之助が初めて東京へ出た時分はたしか一銭五厘であったと思う、昨今の燃料値上りで七銭は高くない方で他の物価の標準からすれば十銭になっても高くないものと思う。

現在、すべての家に風呂があって、というふうではなかった時代だ。銭湯は、衛生管理の面から特別の補助の対象になりえるものであったが、需要があって収支償っている職業であった。

しかし物価は高くなり続ける。

すべてそういう風に依っては五割から十割以上値上げをされているが、公定相場というものはすでに昨年政府によって釘附にされているにもかかわらず、闇取引が公行されているらしいが（処による

と公定闇相場というのもあるそうだが、田舎は配給元も配給先もわかってから闇は行われぬ、

物資の欠乏はあらゆる方面にあらわれてくる。

食料は自給できるとしても、その食料の生産のための人手は不足しているし、諸物資も不足している。

百姓弥之助も石油、セメント、石炭などを少々買入れたが皆公定相場である、ただ石油にしてもセメントにしても鐘かねと袋は返さなければならぬ、そういう風に田舎は公定相場に正直ではあるが、品不足はどうしてどうして、そういうわけにはゆかぬ、地下足袋やマツチ等はいくらか配給があるにはあるがとて廻りつかない。

そして、農村の生産に最も必要とする肥料が欠乏している。

農村も物資の欠乏で肥料自給が最も大切とされる時代が来た、肥料自給に最も有用なのは有畜農業に越した事はない、豚、馬、牛等の例え一頭でも使用すれば家畜としての経済の外にその肥料の副産物が、自作農の為にはどの位有益か知れない、今日この際有畜農業は最も奨励さるべき筈なのだが、それが行われぬ悲しさは、飼料

の欠乏である。

そして、昭和十五年夏、弥之助は書きつける。

すべての物価が皆上った。闇取引は盛んに検挙されているらしいが、検挙されない以外の闇取引はいつ止むべしとも思われぬ。これはあながち闇のみが悪いのではない。一つは日本全体に於て非常時の体制が整わない先に、事態が愈々進んで行くせいである。日本の闇取引の横行は人慾の方から云うと、不自然というよりも、寧ろ自然に出ずるものがある。さりとて闇取引が黙認公行されることは経済の地獄である。これは取締らなければならないが、ただ取締るだけでは手に余るものがありはしないか。日本の経済も、これからいよいよ骨が折れる。

弥之助の人間らしさがみられる。形式的に威丈高に不正ときめつけようとしぬ。不正の中にみえる人間の自然をみるのである。日支事変の進行にともなう戦時的歪みが、人間の自然にかける圧力をみているのである。戦時とはともかく人間の自然にとつては異常なのである。

汽車賃は去年と変らない、すべてのものが上る間に、汽車賃だけ

変らないのは、唯一つの喜ぶべきことだ。混雑は已むを得ないとしても、交通機関の賃金だけは、いかな非常時でも妄りに異動させたくないものだ。それを考えると逸早くハガキと切手の値上げをしたことに多少の憾みが遺る。

国有鉄道であった汽車の賃金は据置かれていたのに、郵便料は値上げされている。昭和十五年の七月もずっと押詰って、信州高原への旅での感想である。ちなみに、この八月十日に『百姓弥之助の話』は一応書き終えられ、高原を下ってくることになっている。

## 六

百姓弥之助の考え方の中に、平板化されていくことへの批判が流れている。

昭和十三年春の記述に、つぎのようにある。

百姓弥之助は或日の事、植民地を出て多摩川の沿岸の方へと歩いて行って見た。昔に変わるいちじるしいものは水道と水田であった。

水道と云うのは多摩川の本流をここで分けて一方を玉川の上水として、江戸以来東京へ引き、一方はそのまま東京湾へ落したものが、昔はその分水も豊富であったが、東京の拡大するにつれ、今はもう殆ど全部を上水へ取入れてしまって、六郷の方へは殆ど一滴も落さないと云うしぼり方になって居る。それからそのあたりの水田も弥之助が子供の時代とは打って変って劃一の耕地整理が出来上って居る。

画一化されていく田園を是とするか否とするかは、考え方の差異である。現代でも、このことは、いずれが正しいという決定はなし難い。しかし、生産性を重視する方向で、画一化は現代でも押し進められているが、それへの批判が衰えているわけでもない。弥之助の目の前にはどのようなものが見えているのか。

以前はこの水田が甚だ不器用な区分で、田圃としての面白味を十分に持ち、その間を流れる田川の如きも芹やその他の水草が青々として滾々と水の湧き口などが幾つも臍のような面白い窪みをもくもくと湧き上げたものだが、今はそんな趣きはすっかり無くなってきちんとした掘割になってしまった。斯様な耕地整理によって年々若

千石の収穫は増したであろうが、どんな造庭師にも出来ない田圃の面白味はすっかり無くなってしまった。

田圃の面白味という立場からだけでは、年々の若干石の増収を保障する耕地整理の画一化は批判しきれるものではない。

水道はどのようになっているか。

上水の水道沿岸に於てもやっぱりその事は云える、江戸以来の玉川上水、日本第一の水道であったところのこの玉川上水は弥之助の少年時代は兩岸から昼猶暗いところの樹木がかぶさって居たり、危うげな橋が渡されて居たり、掘割ではありながら自然その水路も底の見え透らない深さをもつところもあつたり、そうしてそれ等のものすごい淵には幾つかの伝説が附着して居り、或は河童が棲んで居るとか、小豆洗婆あが出るとか、こんが引き込むとか云う云いつたえがそのまま受入れ、昼間通る弥之助の子供心もおびえしめたものだが、今はそれがすっかり底を浚われて、深さもどこまでも平均され、兩岸はコンクリートでつき固められ、全く人造掘割の平板な通水路にされてしまっている。

そして、河童にまつわる説話、小豆洗婆や狐や狸の伝説、正体不明

のまま肯定されていた、こんの話などが紹介され、若い男女の心中や身投げが想像される。

それに続いて、弥之助の批判が展開されるのである。

今時は川底も平均して、人間が飛び込んでも沈みきるようなことは稀であるからそう云うグロも全く棲家を失ってしまったらしいけれど、そう云う不自然の中の自然な風景も伝説も同時に全く消滅してしまった。もし明朗という意味がそういう風に平板に人間の利便だけを標準として軽く浅くなるという意味ならば明朗は安っぽいものだ、そうして斯様に明朗化され平板化された進歩というものの中に住民の生活が内外共にどれ丈向上したかと思えば、それは殆ど何もない。失う所が多くて得る所が絶無のようにしか百姓弥之助には思われない。

不自然の中の自然、それは不合理、非合理の中に潜む合理性に似て、新しいエネルギーとなっていくべきものだ。すべてのものにローラーをかけることで特殊性を消滅させそれを近代性と見誤ることの危険をいいあてているのである。人間の、しかも、いまの人間のいまの利便だけを標準とする考え方に警鐘を鳴らすことになっている。さらに、明朗化され平板化された進歩は、決して住民の生活の向上に役立つ

いないというのだ。

平板化は、水道や田圃ばかりではない。人間にもそれがみられると弥之助は考える。

……弥之助の植民地に近いあたりの農村状態はすべて平板へ平板へと進んで行って、表面は兎に角内容生活は少しも向上したとは思われない、のみならずいよいよ唯物的に流れ流れて、さっぱり趣味というものが無くなってしまっている。弥之助はこの沿革をもっと科学的にしらべて書いて見たいと思つて居るが、さし向き人間の方から見ると、昔と違って度外れの人間というものが、すっかり後を絶てってしまったように見える。

傑れた人物というものも出ないし、また異常なる篤行家とか奇行家というものもとんと出ない、また昔は名物の馬鹿が各村に存在して居たのだが、今はそういう馬鹿も全く影をひそめてしまった。

そして、村の崎人伝を綴るのである。

降っても照っても毎日一分一秒も変わらないで通る「おてんとうさま」とあだ名される荷車挽き、毎日山から薪を一駄ずつ背負い出し、それ以上の仕事も以下の仕事もしない酒呑みの為朝、飲んだくれの栄五郎ボッチ、学者で小学校教師をしながら百姓をしていて馬糞を拾い歩く

亀先生などが語られる。

是等は皆その当時の村の崎人の一部であるけれども、今ではこういった様な桁外れの人間はすっかり影をひそめてしまつて、製造した様な人間のみ多くなつてしまつた、丁度田圃が碁盤の目の様に整理されてしまい、水道がコンクリートの護岸で板張の様な水底に均らされてしまい、蜿蜒と連なつた雑木林が開墾されて桑園とされてしまつた様に、平明開発はあるけれども蝦蟇も棲まなしい狐兎も遊ばなくなつた。奇物変物もすっかり影をひそめてしまつた。では富の程度でも幾分か増進したかと問えば、それどころかこの村でも目下一戸当り千円の借金に喘いで居る。

この一戸当り千円の借金は、弥之助がもっと深くこの植民地の農村を熟知していくに従つてふえていく。「尚よく聞いて見ると、一千元どころではない、二千元以上の平均に当るそうだ」と書いているのである。

そして、具体的には、小林保蔵とか、中野孫二郎とか、弥之助の幼馴染みの借金話が、あちこちの項に顔を出す。

平板化、画一化は決して庶民の暮しにプラスをもたらさないのである。それは、自然や田圃の面白味ということだけではなかつた。

統制というのは、一種の平板化ということになるが、百姓弥之助は、権力による統制を正面から烈しく非難して自爆するようなことはしないけれども、心情的にもそれへの批判を持ち続けていくのである。

## 七

小説『百姓弥之助の話』は、中にも記されてあるように、「全体には全体の体系があり、各一冊には各一冊の読切り価値がある」というものであって、この小論で、第一冊「植民地の巻」から第七冊「リンコルン角度の巻」まで全体にわたって論ずることは不可能であり、また、わたしのよくするところではない。一方、その一冊のどれかを微に入り細に及ぶことも難いのであるが、百姓弥之助の身辺雑記の中に、弥之助の心情、ひいては、作家中里介山の内部がはしなくも露呈されており、そのことの一部について触れたつもりである。そして百姓弥之助は、この第七冊で介山の中断によって行方不明となるのかというところでもない。

小説『百姓弥之助の話』は、第七冊「リンコルン角度の巻」で一応

終わっているが、百姓弥之助は、その後、小説『大菩薩峠』の中に顔を出す。

小説『大菩薩峠』の最終巻となった「椰子林の巻」に、お銀の故郷、有野村に居を占めた与八が、今様の木食上人となって勸化し歩いていくことの一章がある。

与八は、荒地の開拓を、ハト麦の栽培、ジャガタラ薯の増産を説き、戦争と饑饉の怖しさを語り歩くのである。

そこへ慢心和尚が来合わせて、与八のことを肯定し、天明・天保の饑饉の悲惨な浅ましきについて説き継ぐことになる。

慢心和尚は、百姓は平生から丹精してよく作り、丹念して貯えて置くようにと勧める。節食を勧めるものがあるが、坊主や役人、学者はそれでいいが、百姓はうんと食うがいい、大きな口をあけて飯を食う権利があるのは、百姓だけの役徳だと思いがいいと説いているのである。

そこへ、一人の風来人として旅の者らしい男が現われ、自己紹介をはじめめる。

「わしは、武州<sup>はなせ</sup>勿村<sup>むつむら</sup>というところの百姓弥之助と申しますが……」  
と、一冊の部厚の帳簿を慢心和尚と与八の前へ差し出す。その帳面は「百姓大腹帳」と書かれた、俗にある「大福帳」型の帳面である。

百姓弥之助は、戦争、饑饉の心配から節食、節米が申し触らされているが、百姓は物をうんと食べ、腹を十分にこしらえ、度胸を据え、ウンと食べて、ウンと働けという勸化のために歩いていると告げるのである。

この勸化も百姓が何を言うかと世間が取り合ってくれないから、『百姓』という文字の意義から説いて聞かせているというのである。

その「大腹帳」の開巻第一は

「そもそも『百姓』といふは、支那四千年の古典『書経』並びに『詩経』等に見ゆるを最初とすべし。『百姓』とは、あまねく『人民』といふ意味にして……」と始まっている。

あと、天皇と人民の関わり、日本書紀三十巻に七十四ヶ所が天皇が親しく『百姓』の語で人民に呼びかけていることなどを記し、衣食住は農業を根幹としていることを説いており、おしまいは「百姓大腹なれば国富みて兵強く、百姓空腹ならば国貧にして兵弱し。つとめざるべけんや」と終っているのである。

『百姓弥之助の話』の第六冊、「日本百姓道の巻」の主旨の縮刷である。文体が文語体になっているところが、小説『大菩薩峠』の状況へ合わせてあるわけである。

「百姓大腹ナレバ国富ミテ……ツトメザル可ケンヤ——大賛成！」と慢心和尚に双手を挙げて賛成され、百姓弥之助も大いによるこぶと

ころがある。それがその後どうなったのか。弥之助はここで消える。

しかし、小説『大菩薩峠』は、この百姓弥之助が現われるところ、その直後、勝麟太郎の出現、安房守に叙され、新しい物語の展開を考えさせる段階で、筆が絶たれてしまっている。駒井能登守の自由の島、椰子林の中のユートピアの建設も構想の段階に打切られてしまっている。

小説『百姓弥之助の話』は第七冊「リルコン角度の巻」で終わり小説『大菩薩峠』は「椰子林の巻」で終わっている。この原因を中里介山の発想の枯渇というひとつもある。

中里介山に構想の枯渇があったはずはない。『百姓弥之助の話』第七冊「リルコン角度の巻」においても、第八冊は何にするか、「安藤昌益の巻」にするか、「頃近見聞の巻」にするかと迷っているほどである。

『百姓弥之助の話』の中でも、『農業絶対論』を書きたいと語り、「いつか一つの独立したリルコン伝を書いて見たいと思わぬではないが、それはいつのことかわからぬ」とも述べている。すでにまた、第二冊「塾教育の巻」にも、「介山居士も少年時代から熊沢番山の私淑者の一人で、そのうち番山伝を書きたいと云っている」と語る部分もあった。介山には、次々に出てくる豊かな発想に、選択に迷うほど

の題材を持っていたはずである。構想の枯渇にはほど遠いものがある。ここで注意すべきは、介山は予告したことは必ず実現していることだ。第一冊で、いつか、「徴農論」を書くといったことは、「国民皆農論」となって結実し、予告「トルストイ論」は「イワンの馬鹿の巻」となっているのである。

介山には、残された創作ノートがあり、小説『大菩薩峠』の次の巻が構想され、調査されていたことがわかっている。昭和十七年二月十五日付からはじまる「第十九冊新作備考」だ。このことを、わたしは、昭和三十七年に発表した「小説『大菩薩峠』をめぐるいくつかの問題」(雑誌『日本文学』)で言及したことがある。

『大菩薩峠』の「椰子林の巻」に勝安房守の叙位が布石として準備され、つぎの巻には勝麟太郎に対して坂本龍馬が配される構想がすでに成っていたのである。それが、突如として切られたのは何故か、それには、もう答えるものは誰もいないのである。

介山は筆の早い作家でもあったし、筆まめな作家でもあった。『百姓弥之助の話』の第一冊が刊行されたのは昭和十三年四月であるが、『大菩薩峠』第三十八巻「農奴の巻」は、書下しとして、昭和十三年二月に刊行されているのである。百姓弥之助の話の二ヶ月前のことだ。第三十九巻「京の夢おう坂の夢の巻」は、書下しとして、昭

和十四年十二月刊行であるから、『弥之助の話』の第五冊「国民皆農論の巻」の昭和十四年十一月の刊行におかれること一ヶ月となっている。この間に、すでに述べたアメリカ視察旅行が挟まっているのである。『百姓弥之助の話』に平行して、小説『大菩薩峠』が二巻完成していることになる。

『大菩薩峠』第四十巻「山科の巻」は、昭和十五年九月起稿、十月十六日稿了、十二月刊行となっているから、『百姓弥之助の話』第七冊「リンコルン角度の巻」の稿了、八月十日よりあとに起稿されたことになっている。「椰子林の巻」は、昭和十六年五月十一日起稿、六月二日稿了、八月刊行となっている。わずか一ヶ月たらずのうちに大部のこの巻は完成しているのである。

ただ「椰子林の巻」は脱稿後三ヶ月を経て刊行となっており、用紙の配給制度など統制の影響が顕著となっている。しかし介山の筆力は一向に衰えを見せていないのである。

そして、構想はまだ豊かに湧きつつあったのである。にもかかわらず、昭和十六年以降、介山の創作は消えたまま現われなくなってしまうのは何故か。

介山の死は、一九四四年(昭和十九年)四月二十八日、阿伎留総合病院で数え年六十、死因は腸チフスであった。

絶筆より死に至るまでこの間三年、介山は黙して語っていない。



や、ほんとうに黙して語っていないのであるか、どうか。速筆で、記録癖ともいえる程であった介山が、片言隻句も書き残さないでいることが可能であったろうか。徒然草の「もの言わぬは腹ふくるるわざ」の苦しみによく耐えることができたろうか。

わたしは、介山の実弟の中里幸作氏に遺稿所在をくどく訊ね、介山記念館の本棚の間を這いまわった時期がある。すでに先輩が調査済みだったに違いないのに、納得しなかったのだ。

『百姓弥之助の話』のなかで弥之助が出征兵士見送りの行列を見ていると想定された三階の建物は、西隣塾の建物であって、わたしは何回もというより、しばしば訪れた時期があった。

わたしは中里介山の警咳に接したことはない。わたしがしばしば中里介山記念館に足を運ぶようになったのは、介山の死後六、七年経っていた頃のことになる。

戦後、各地で文化講座などと呼ばれる各種の学習会が開かれた。そうした学習会が西隣塾の建物を借りて開かれることがあった。一九五〇年（昭和二十五年）だったと思うが、わたしはそこで高橋慎一の「流行歌にみる現代史の流れ」の講演などを聞いた。そのときが、介山記念館へ入った最初であった。

西隣塾は、壁や柱や天井に一面に貼られた、介山あての手紙の封筒、介山の著作の紙型、その間に机龍之助の等身大の人形や新国劇の絵看

板などが雑然と並んでいて、ひとりでいたら気味悪いだろうとさえ思えるたはずまいであった。その二階で、学習者がいっぱいいる心安さもあって、高橋慎一の軽口にげらげら笑って応じたりしたのだった。そのとき、わたしはまだ、介山の主著『大菩薩峠』を読み了えていなかった。『百姓弥之助の話』の存在さえ知らなかった。隣人社の売れ残りの本を参加者一同と同様にもらって介山に他の著作があることをやっと知った程度であった。その後、介山の著作を読み広げ、記念館へ訪れるようになり、全国の高校国語研究会の結成のかくれた原動力となった多摩地区高校国語研究会の会務を担当していたわたしが会場に借りて、浪本沢一の芭蕉俳諧の研究の報告を聞いたりするようになったのである。

こうして昭和二十五年以降三十年代にかけて、怠け者のわたしも漸く介山研究にすこしずつのめり込みはじめることになった。

昭和二十年代もすえのころ中里幸作氏に、中里介山賞の創設をけしかけて、芥川賞、直木賞しかなかった文学賞に中里介山賞を加えることの重要性を説いたのだが、まだ若いわたしの激越な口調など、却って不審されるだけであった。わたしは映画演劇、舞台芸術全般を含めて、民衆性を持つ文化すべてに渉る賞を介山賞に最もふさわしい範疇だと説明して、介山の著作権料の幾分かを拠出されるように懇請した。大半の費用は、出版界をまわって集める目算さえたてていた。しかし、

介山の遺産相続の問題をかかえて、苦い経験を持っており、まだ解決をみていなかった幸作氏には、わたしの提言は、不逞な青年のたわごとととられた面もないではなかった。

わたしは、介山が『百姓弥之助の話』『イワンの馬鹿の巻』末尾近く、第九章の中で、遺産や著作権のことに言及しており、公的な機関への寄贈を是とする方向にあったことから、文学賞が最もふさわしいと考えたものであった。しかし、介山にとっては、売名とも見える文学賞は喜ばなからうかとも躊躇した。

その後わたしは、介山賞については、深追いしないことにして、介山の遺作の所在に関心を向けたのだが、これも徒勞に終わったのだった。これらのことは一九六〇年（昭和三十五年）前後までのことであって、最早、三十年の以前になる。が、わたしには、今でも、中里介山には遺作があるという思いを断ち難いのである。

介山が小説『百姓弥之助の話』に予告したとおりに、もし、第八冊「安藤昌益の巻」があるとすれば、江戸後期の思想家についてどのよう  
に介山が評価したか、昭和十年代後半、どのような先見性を介山が示し得たか、たいへんな読み物となったであろうし、「頃近見聞の巻」があるとすれば、日本がABC D包囲網によって経済的な圧迫に耐えられず、仏印に侵略を開始しようとする時勢、日米相争う風雲さらに急の潮流をどのようにとらえたか、それは、すぐれた民間資料となり

得ている筈だという思いがあるのである。最終巻「リンコン角度の巻」には、「百姓弥之助はそのうち「農業絶対論」を書きたいと思っている。」とも書いているのだから、介山の農本主義の神髓がそこに描かれているかもしれないのである。

大日本文学報国会への入会勧告を正面から拒否し、傲岸な軍部の文化政策と、まっ向から対峙した介山の頑固さが、時代に抗し得ず黙ってしまったとは、どうしても了解できないのである。

そして、「リンコン角度の巻」を書いた介山が第二次世界大戦の勃発、それに続く時代をどのようにとらえたか、知りたい思いにかられたのであった。

小説『百姓弥之助の話』から離れてしまったが、その続編への期待が、言わずもがなのことを言わせてしまった。しかし、この作品には、それを言わせてしまうほどのものを持っているとも言えよう。

問題は、いくつも残っているが、ひとまず、中間の報告として、この稿を終える。

注(一) 隣人社発行、一九三八年(昭和十三年)第一冊「植民地の巻」以降、一九四〇年(昭和十五年)第七冊「リンコン角度の巻」の七冊本。筑摩書房刊「中里介山全集」第十  
九巻に再録。

注(二) 中里介山は本籍東京府(当時は神奈川県)西多摩郡羽村

羽六四〇。本名、中里弥之助。父弥十郎、母はなの次男として、明治十八年四月四日出生。長男一郎は夭逝。

注(三) 引用はすべて筑摩書房版『中里介山全集』に依る。表記

すべて現代表記に改められており、他からの引用(中里介山の作品中における)は古い表記となっている。

注(四) 旧尺貫法、十反。一反は三百坪、約九九一・七平方メートル。一反は十畝一町は約一万平方メートル。

注(五) 大菩薩峠にあり、小説『大菩薩峠』の読書たちから建造

寄贈をうけ、介山の山荘の一つとなった。

注(六) 作品の冒頭、「関東の平野には今ぞ秋が酣たけなわである」とある。

注(七) 「塾教育の巻」第九章に、「第一は、塾教育は、中心人

物が一身を打ち込んでやらなければならぬ、片手間仕事ではやれない。」とあり、第二には、塾教育は人の子を良く

しなければ悪くする事。第三には往時の塾風を以て、今日の塾生に当てはまらない事。第四には経済的の基礎に充分

の用意を置いてかからなければならぬ事。第五には在学者及び出身者の生活保証の点である、と述べ、それぞれに

解説を付している。

注(八) 「殊に日本文学の特長としては、絶対に官辺、或は権力

者の支持、後援を仰がずして来ているといことが、日本文学の一つの大特長といわなければならぬ」と記している。

注(九) 政治家、ジャーナリスト。介山は田川大吉郎によって

「都新聞」に拾われ、文筆活動の場を与えられて以来、田川大吉郎を徳としている。田川はこの時、上海で日本軍隊

の文化施設破壊を復旧する方途を考えるために中国へ渡航することになっている。

注(一〇) 介山の姉の子、池谷廉一は実業学校で水泳選手として活

躍したが無理が重なって肺結核となり、鉄道自殺を遂げる。このことを記した介山の小冊子。

注(一一) Why was Lincoln murdered? by Eisenschiml

注(一二) 現JR八高線、八王子——高崎間の支線。

注(一三) 昭和十二年。日支事変は昭和十二年七月七日勃発。ここ

ではその直後ということ。

注(一四) 現JR八高線高麗川駅。

注(一五) 東京都千代田区神田。

注(一六) 立川飛行場、と考えられる。米軍横田基地の基礎となっ

た福生の飛行場はまだ整備以前にある。

高松短期大学研究紀要

第 21 号

平成 3 年 1 月 31 日 印刷

平成 3 年 1 月 31 日 発行

**編集発行** 高松短期大学  
〒761-01 高松市春日町960番地

TEL (0878) 41-3255

FAX(0878) 41-7158

**印刷** 高東印刷株式会社  
高松市東山崎町596番地